

1. オーペルージュ・ガンヌ（住所：92, Grande rue）

1834年にガンヌ夫妻が始めた宿がはっきりとしている。この宿には世界中から数多くの風景画家や動物画家が通過していった。こうした画家たちは1870年までフォンテーヌブローの森の「モチーフ」を描いた。この宿の記録が神秘的なことに現存しており、こうした画家たちが宿泊した時期を明らかにしている。この宿が1995年に修復された後、バルビゾン派美術館の主たる部分がこの宿の中に設置された。この宿を訪れる人々は、当時「ガンヌの絵描きたち」

と呼ばれていた画家たちが愛した雰囲気を感じることができるだろう。3階建ての建物にアーティストたちが装飾を施した家具や装飾具が元の場所に戻されている。1階には、3つのベッドが置かれた共同寝室が元のまま残されており、その部屋の壁は画家たちが雨の日や森から戻った際に描いた絵やスケッチで飾られている。そして、他の4部屋では美術館の常設展示がおこなわれている。展示された作品は、例えば、コロ、ジャック、デュプレ、ドゥ・ペンヌ、ギャシィ、ラヴィーユといったアーティストの作品だ。開館時間は火曜日を除き毎日、午前10時から午後12時30分と午後 2時から5時30分。

2. テオドール・ルツソーのスタジオと自宅 アルフレッド・サンシエ (1815-1877) の友人で伝記作家のテオドール・ルツソー (1812-1867)

は、この偉大なアーティストが1847年から亡くなる1867年間で暮らした質素な自宅に着いてこう記している。

「このひっそりとした小さな家には素朴な庭があり、建物はたったの2階建てで、暗室と納屋を彼はアトリエに作り変えた」世紀の終わりに、この納屋の古い部分はチャペルへと作り換えられ、1950年前後に、現在のバルビゾン教会へと拡張された。庭には、戦争記念碑が置かれ、その中心には大ゴールの胸像が置かれている。これはエルネスト・レヴィヨン (1854-1937)

が仏米基金の支援によって、1920年代に村に提案したものだ。1995年から、テオドール・ルツソーのアトリエ兼自宅は美術館の別館となり、修繕が施され、テオドール・ルツソーの記念品が展示されている他に、ローサ・ボヌールの作品や国立美術館のコレクションも展示されている。

3. ジャン=フランソワ・ミレーの自宅兼アトリエ

ジャン=フランソワ・ミレーはこのアトリエ兼自宅に1849年から住んだが、現在は美術館として利用されており、プライベート・コレクションの展示が行われており、当時の記憶を蘇らせる場所となっている。ここでミレーは傑作の作成を行った（「晩鐘」、「落穂拾い」、「種まく人」、「母親の心づかい」など）

。彼は1875年1月20日に亡くなった。彼の未亡人と相続人たちは彼の不動産をそのままにしたため、手づかずの状態に残っている。政治的・歴史的な理由に加えて、訪問者たちは、なぜ彼がバルビゾンに注力したのか、その理由を発見できるだろう。それは「素晴らしい光」である。部屋の1室は現代のアーティストの作品の展示に使用されている。火曜日を除く毎日開館されており、開館時間は午前9時半から午後12時半と午後2時から5時30分。

4. ホテル・ドゥ・バス・ブルー ロバート・ルイス・スティーヴンソンが宿泊した場所。100年間にわたり、さまざまな人が宿泊客となった。

6. テオドール・ルツソー (1812-1867) とジャン=フランソワ・ミレー (1814-1875) のメダリオン

村に栄光をもたらした巨匠2人の肖像が隣り合わせになって森の入り口に飾られている。彼らは人生の長い間、この入り口を通して森の中を散歩しに行った。このモニュメントが設置されたのは1884年4月19日で、彫刻家のアンリ・シャピュが作品を作成したが彼はルメ（メルン付近）の生まれである。この2人の画家を記念して、バルビゾンのアーティストたちが集めた公的基金を使用して作成された。

7. バルビゾンの象 この象は自然の大地が生み出した彫刻だ。大量の巨大な砂岩の上に、鳥や他の動物を想起させる形が広がっているが、これらは自然によって生み出されている。

8. ジャン=バティスト・カミーユ・コロー (1796-1875) の絵画モチーフ

1829年前後のことだったが、コローはイタリアへの旅から戻ってきた。イタリアでは、彼は風景画の教師から指導を受けていた。コローはフォンテーヌブローの森を定期的に訪問しており、それは彼の視覚芸術や技術の訓練を完了するためであった。森の中に彼はローマ地方の田舎に似たものを見い出した。「フォンテーヌの森の風景」(作成年1830-

32)と呼ばれる絵画はサンリス美術館の所蔵作品となっているが、この作品では、彼はバルビゾン近くの森の混沌とした岩の風景に注意を奪われている。コローは岩と木をいかに描くかに純粋な熱意を示す一方で、人間の存在抜きに自然を描くことに困難を感じた。したがって、若い農夫が構図の中心に据えられたのだ。

コローは微細に、かつ、正確にモチーフを再現しようとした。ほぼ2世紀経過しても、私たちはコローがイーゼルを置いた場所を正確に見つけることができる。

10. ランタラの影 (1729-1778) ミリラフォレ付近のオンシーに生まれたシモン・ランタラ (ランタラとして知られる)

は、母を亡くした後、ノワジー・シュール・エコール付近のシャトー・ドゥ・ルヌミエールで羊飼いとなった。羊の番をしながら、彼は絵を描き始めた。城主の息子はランタラに才能があることを発見し、ヴェルサイユの画家に弟子入りさせ、その後、ランタラはパリの画家から習った。その後、ランタラはパリで画家業・彫刻家業を始めたが、事業の才覚はなく、自分の作品を安値で売り払っていた。彼は貧困の中で病に倒れ、慈善病院にて49歳で亡くなった。彼の作品は風景画の先駆けとして認識されており、バルビゾン派の画家たちによって後に流行となった。ドゥヌクールによって、彼の名前は「ランタラのドゥルモワール」と結びけられたままである。この作品は家畜の群れが森に草を食みに行き、大きなオークの影で半数をしていた時代を思い出させる。まだ、何匹かそういった家畜を現在も道の傍らに見かけることはできるが。詳細については、ディカバリー・サーキットの見どころに関するパンフレットをご参照いただきたい。

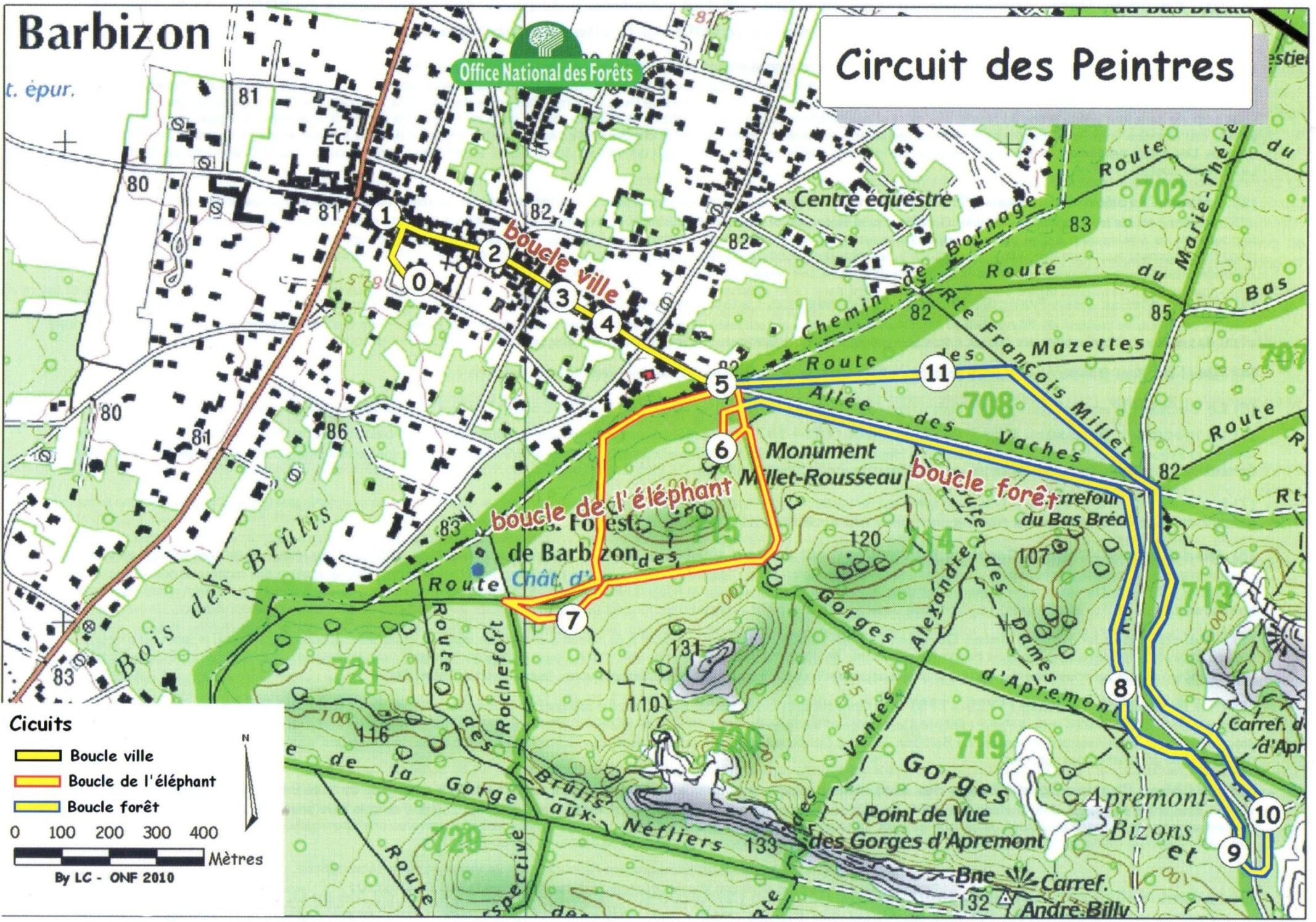
11. シャルルマーニュのオーク

19世紀にアーティストがバルビゾンに現れた時には、バルビゾンから森への道であるアレ・オー・ヴァッシュの両脇には1802年に植えられた若いオークの樹々が並んでいた。1830年には、樹々は深く暗く、魅力のない状態だった。1860年に、ジャン=フランソワ・ミレー (1814-1875)

は、この種の森がとりわけ雪に覆われた際には持つ単調な暗さを描くことに成功した。現代ではマゼット・フォレスト通りが200才を超える樹齢のオークの森の中を走っている。その中でも代表的なオークの木はバルビゾンの子供たちによって2000年にシャルルマーニュのオークと名づけられた。

Barbizon

Circuit des Peintres



Cicuits

- Boucle ville
- Boucle de l'éléphant
- Boucle forêt

0 100 200 300 400 Mètres

By LC - ONF 2010